

寝松

寝松は現在の本門の前に寝そべるように伸びていました。枯れ昭和四十一年に伐採しました。山北で現在六十から七十才の方には寝松は遊び場所でした。

寝松が誕生した頃、上か横からの枝が覆っていたので上に伸びることが出来ず低く前に伸び育ったのです。伐採の際に皆が集まり見送りました(左上側写真)。着物姿の叔母さんたちも木に上がりました。写真左手に大きな松が見えます。

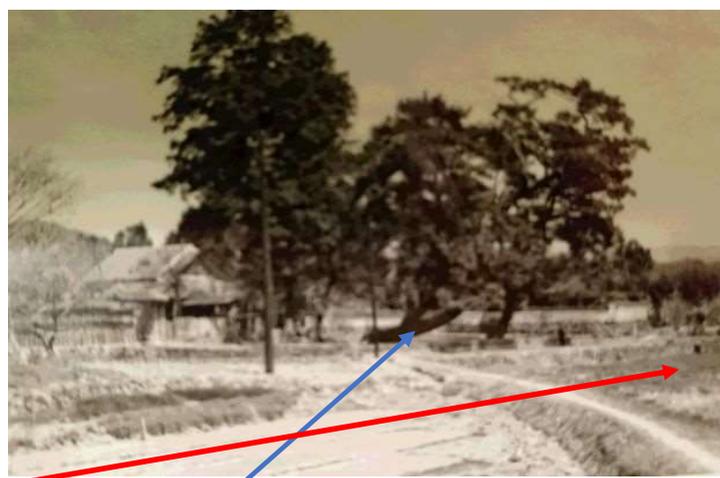
寝松伐採後の切株(左上から二番目)、横九十七センチ、縦七十九センチの年輪を数えると二百十年でした。お下の初代の覚兵衛が住み出した明和八年には樹齢十五年で、伐採は容易でしたが残されました。寝松を覆っていた木または枝は、文化七年に建立された座敷の玄関の正面なので伐採されたのでしょうか。伐採された木は番屋の部材として利用されたかも知れません。寝松は建物の部材として利用不適合で、覚兵衛が住み出した明和八年から出入の邪魔でなく樹齢十五年で伐採容易でしたが、生き延びたのです。切株の形状から上側の写真の右側の枝分岐した箇所を切り出したものではないでしょうか。

寝松が生まれ育った埋立地

主屋の試掘で1メートル掘ると、地山(山から続く地面)が出て来ました。前の田の畝作りで、表面の土を二十センチ除くと地山となりました。前の田と家の敷地の間に1メートルを越える石垣があります。その石垣の下を通り田の地山と敷地の下が繋がるのです。



主屋試掘で出た地山層 地山は前の田に続く



寝松 昭和31年以降に撮影

あったのでしょうか。文助は家系圖に移住時のことを次の様に書いています。

明和八年辛卯五月四日 四坊池ノ上江別住・

父が付き添ったことは書かれていません。移住した年だけでなく日が書かれています。文助は家系圖作成に当たり平八正久の日記を見付けたとありますので、平八正久の日記から転記したと推測します。

寝松と池

家系圖の「四坊池」について検証します。明治に地種が「ため池」の地券が発行されています。そこは現在の西門近くです。この池が「四坊池ノ上」の池でしょう。番屋の西側に池があったのです。そこには湧水はありませんので、西の溝の水が流れ込んでいたと推測します。覚兵衛が住む前に溝を流す先に池を作った人、それが四百年前に山北に移住した喜三郎です。何故か不明ですが、喜三郎の息子「武左衛門」はこの地を放棄し、山北の安弘から岡芝の地に移っています。喜三郎が整地した地に玄孫の覚兵衛が住み出したのが明和八年で、それより先に根を張り住んでいたのが、寝松とその背後の木々だったのです。

高城唱玉集（明治初期に中国と高知の文画人が綴った漢詩集）

に「松一樹三百年舊裁」とある家が出て来ます。その家の持ち主は小松松月醫伯とありますが、明治に養子に来た又彦の兄雋（春田）もこの集に参加しており、記載された松の様子から春田の案内で弟の家に来たと推測します。松の樹齡「三百年」はおおげさ



右写真は昭和二十年頃撮影

右写真左下は食料増産で池を埋め畑としている。



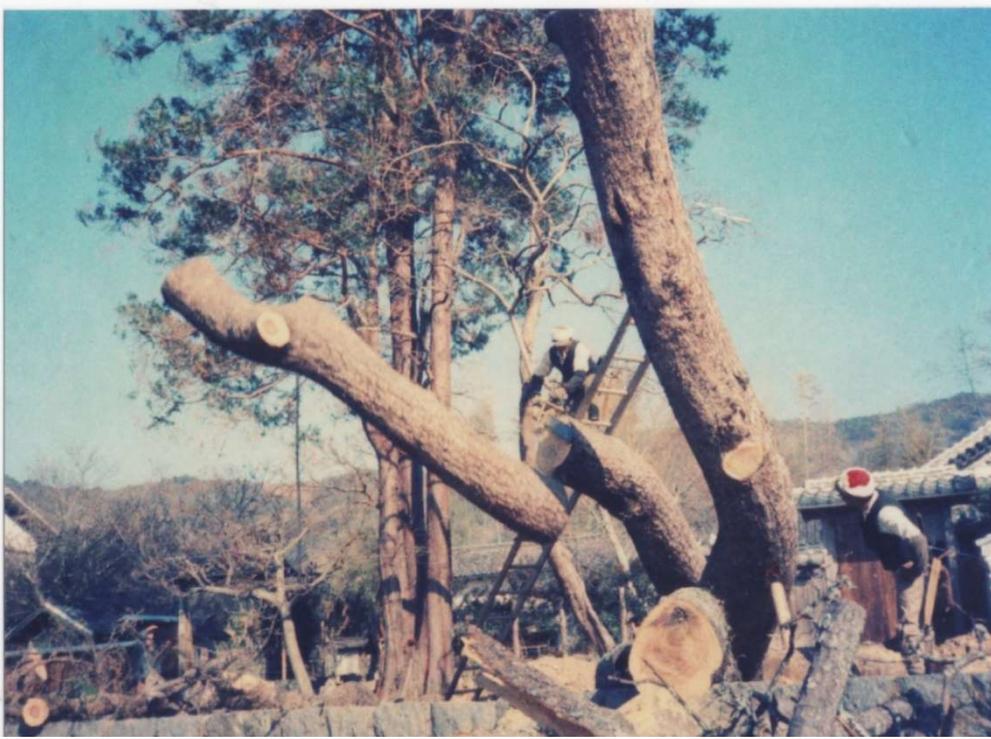
右写真は昭和二十年頃撮影

右写真左下は食料増産で池を埋め畑としている。

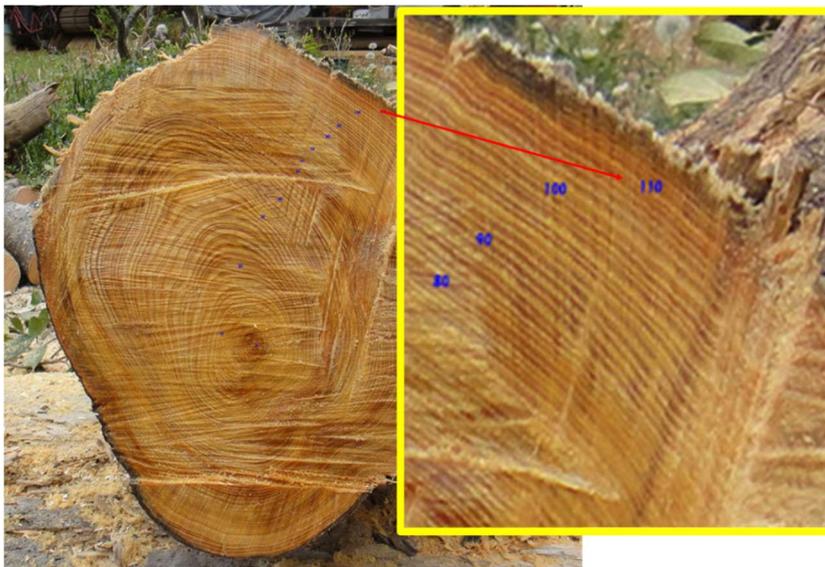
ですが、寝松などの松の様子を書いたのでしょうか。その中に「看池底睡蟠龍松」とあります。これは安岡の家の寝松が「四坊池」に映った姿でしょう。前頁の下側の写真は、池のあった位置に出来た水溜りに映った番屋です。上側の写真は番屋と寝松が並んでいます。これから池に寝松が映れば「松がトグロを巻き寝ている龍となる」とを想像して下さい。

寝松伐採と根

寝松の伐採は二人の職人で行いました（左写真）。背の高いヒノキは四年後、風除けがなくなったためか根こそぎ倒れました。その左の細い木はモミジで、平成二十



枯れた寝松 二人で伐採 昭和41年



番屋で掘り出した寝松の根（推定）年輪幹より密で110年

六年まで生きました。ヒノキの右（ハシゴの陰）が渋柿でこれだけ今も生き延びています。

背後の番屋は昭和三十一年に売却したのでありません。その後、譲受、前頁に示すように復原しています。その番屋の復原工事で松の根が出て来ました。通常の木は幹が枯れば根も朽ちます。松の根は油（松脂）が多くあり、成長停止しますが、半世紀過ぎても残っていました。

根の太い部分の年輪は幹のより密度は高く

幹年輪密度 10.5年/cmから

2.3年/cm

根年輪密度 22.5年/cmから

9年/cm

二倍から四倍の差があります。

寝松の誕生は覚兵衛移住より前、寝松は覚兵衛↓廣助↓源右衛門↓恒之進↓覚馬↓房↓寅次郎（正風）↓又彦↓秀彦の九代を見ていたのです。根の年輪百十年超、覺之助の次男 厩次郎（正風）

生誕より前に伸び出したのです。寝松がビデオを持っていけば、面白い画像が撮れていたように思います。

寝松で遊び回った縁戚の従兄弟は幼いながら伐採を無念な思いで見たそうです。祖母は明治十八年からの付き合いで、松が枯れ始めるとお神酒をかけ回復を願いましたが、他にあった数本の大松も一斉に枯れてしまいました。祖母は伐採したのを売却した時「百年生きてこの値段」と言ったそうです。

埋立と地中のト

主屋が建てられた地面は、前述したように地山の上に約一メートル土を積み上げていました。家の前の田、園芸農地にしていますが、ジクツて（水気が抜けない）箇所があり、そこ穴を掘ると地山が出て来て、底とすると水溜になりました。この深さの地山に沿って地下水路があるのでしょうか。この水溜の水深、雨の後は変化ありませんが、雨が降らないと浅くなっていきます。井戸を掘れない時期はこれと同じ水路の湧水で生活していたのでしょうか。

覚兵衛住み出して三十数年後、主屋を建てた文化五年過ぎに現在の釜屋の位置に井戸を掘ったのです。掘った位置は味噌納屋を跨いでいたようです。掘った深さは八メートル、井戸穴の壁は石を積み上げています（左上側写真）。石積の下に胴木を置いています（左下側写真）。胴木は折れています。腐らず残っています。水が枯れなかったのでしょうか。胴木の設置していた底（左下側写真）は岩盤で、見た目にはこれ以上は容易に掘れないようです。復原工事に於いてボーリングで掘り地盤確認で

も固い地盤を確認しています。主屋の宅地は埋立てた土地で一見不安定ですが、この岩盤で耐震性が高く問題ないと判定されています。

西の井戸は明治に掘られ釜屋の前の井戸より口が狭く、壁は漆喰（上写真）です。深さは釜屋の井戸と同じ八メートルですが、底は岩盤でないようです。

いずれの井戸も水枯はないので水流がある場所なのでしょう。

以上

